弘法大師伝絵巻考

―諸本の分類と概要―

塩出貴美子

はじめに

弘法大師空海の伝記は、歴史的な事実だけでなく、潤色された数多くの説話伝承に彩られながら、後世、次第に膨張して多彩な展開を遂げる。その絵画化の現存最古例は、保延二年（一一三六）制作の旧永久寺真言堂障子絵に見られるが、これは「真言八祖行状図」の中の一図として、空海伝の代表的な事蹟である「秘鍵開題」と「高野尋入」にまつわる数場面を描いたものにすぎない[1]。これに対し、誕生から入定まで、さらには、それ以降の事蹟をも含む総合的な伝記絵が登場するのは、鎌倉時代も中頃に至ってからのことと推定されている[2]。それは、ちょうど新仏教、旧仏教ともに高僧伝絵が盛行し始める時期に一致しており、弘法大師についても、こうした機運に乗じて伝記絵制作が行われたのであろうことを推測させる。

しかし、残念ながら制作当初の作品は伝存していない。現存するのは、十三世紀末あるいは十四世紀初頃に制作されたと推定される絵巻の端本数種をはじめとし、大多数は室町以降の作品である。画面形式からは巻子本と掛幅本に大別されるが、量的には巻子本が圧倒的に多い。それらは「高祖大師秘密縁起」「高野大師行状図画」などの原題を持っていたり、原題不明のものは「弘法大師行状絵」「弘法大師絵伝」などの種々の名称で呼ばれているが、以下では便宜上、巻子本を「大師伝絵巻」と呼び、巻子本と掛幅本を含む場合は「大師伝絵」と称することにしたい。

「大師伝絵」に関する古記録としては、まず『考古画譜』記載の十六件が注目される[3]。ただし、その中には既に焼失したものや、所在不明であったものも含まれている。また、より網羅的な目録としては、昭和九年の大師御忌一千百年に際して長谷宝秀氏が編纂した「弘法大師絵伝目録」（以下「長谷目録」と称する）が重要である[4]。そこには、長谷氏が実際に確認したものと諸文献から拾い集めたもの、合計三十一件の「大師伝絵」が収録されており、前述の『考古画譜』記載の十

六件も全て含まれている。[5]

一方、美術史の立場から「大師伝絵」の研究に先鞭を付けたのは、梅津次郎氏である。考察の対象は現存する「大師伝絵巻」に限られていたが、それらを巻数や内容の相違によって次の五系統に分類するとともに、各系統間の関係についても独自の見解を呈示した。[6]

一　「高祖大師秘密縁起」十巻
二　「高野大師行状図画」六巻
三　「高野大師行状図画」十巻
四　「弘法大師行状絵詞」十二巻
五　版本「高野大師行状図画」十巻

この分類は後続の研究者の均しく認めるところであり、現在に至るまで「大師伝絵巻」研究の欠くべからざる基盤となっている（以下、一から順に秘密縁起、六巻本、十巻本、十二巻本、版本と称する）。その後に紹介された新出作品も、この梅津分類の枠組の中に位置づけられるのを常とした。

さて、右の成果を踏まえて、平成七年に刊行された『角川絵巻物総覧』（以下『総覧』と称する）には、のべ二十三件の現存する「大師伝絵巻」が収録された。[7] 筆者はそのうち十九件を担当したが、同書の性格上、作品ごとに簡略な解説を付しただけで、総合的な考察は行っていない。そこで本稿では、『総覧』の補遺をかねて、同書では除外された江戸時代以降の作品、および同書の刊行後に見い出された資料数点を加えながら、これまでは散発的に紹介されるだけであった「大師伝絵巻」の諸本を、一から五までの系統別に呈示し、その全体像を概観することにしたい。『総覧』所載の作品には＊印を付しておくので、個々の具体的な内容や参考文献については同書を参照されたい。なお、掛幅本については別の機会に述べることにする。

一　「高祖大師秘密縁起」系統

秘密縁起系統の作品は、次の五件が知られる。

①小川家本＊　一巻　永仁年間（一二九三―一二九九）頃
②安楽寿院本＊　十巻　応永二年（一四六八）
③総持寺本＊　二巻　永正十六年（一五一九）
④智積院本　十巻　慶長十七年（一六一二）以前
⑤和歌山県博本　四巻（第七～十巻）　江戸時代前期

②と④は完本であり、他は端本である。「長谷目録」には完本の二件のみが収録されており、②が十六番目、④が十九番目に見える。

まず、完本から見ると、②安楽寿院本は「高祖大師秘密縁起」の内題を有し、序文と六十六段の事蹟からなる。他系統の作品では、巻ごとに目次が、また段ごとに標題が付されたものがあり、これが事蹟名称として用いられているが、秘密縁起系統の作品にはその両者ともない。そこで便宜上、「長谷目録」において新たに命名された各段標題

が事蹟名称として用いられている。「長谷目録」は右の各段標題を記した目次と応仁二年（一四六八）の年記を持つ奥書、そして版本との比較を中心とした解説を収載する。しかし、この解説は事蹟の出入についての指摘は当を得ているものの、版本の成立時期については、詞書の成立時期（鎌倉中期）をそのまま当てはめるという誤りを犯している。したがって、その結論、すなわち秘密縁起は版本を取捨増減して成立したものであるという主張は到底信じることができない。

一方、梅津氏は①小川家本の紹介に際して、②安楽寿院本と十巻本および版本との比較を試み、この三者の関係を長谷氏とは逆方向に、版本の方が秘密縁起と十巻本を合揉して成立したものであると結論づけた[8]。また、②安楽寿院本の序文に大師の没後「既に四百余歳を経たり」という一文があることに注目し、秘密縁起の原本の成立時期は大師の没後四百年に当たる嘉禎元年（一二三五）から四百五十年の弘安八年（一二八五）までの間頃、具体的には「少なくとも文永弘安頃（一二六四－一二八八）」までには成立していたであろうと推考した。現在まで、この梅津説に対する反論はなく、妥当な説として是認されている。

さて、②安楽寿院本は室町時代の写本ではあるが、秘密縁起の現存最古の完本であり、この系統の成立、さらには「大師伝絵巻」全体の成立を考察する上でも極めて重要な作品である。しかし、梅津氏以後、本格的な考察はなされておらず、その検討は今後の重要課題である。なお、その欠を補う第一段階として、②安楽寿院本と他系統の絵巻との関係、および漢文の弘法大師伝との関係について、最近一稿を草したので参照されたい[9]。

もう一つの完本である④智積院本は、「長谷目録」によれば、②安楽寿院本の写本であり、書画ともに智積院第二世祐宜僧正の直筆であるという。長谷氏は、祐宜の入京が慶長七年（一六〇二）、没年が同十七年（一六一二）であることから、その間に書写されたものであろうと推定している。この作品については筆者は未確認である。

次に、①小川家本は昭和十三年（一九三八）に梅津氏が紹介したもので、当時は池田家の所蔵であった[10]。②安楽寿院本の第七巻に相当する内容の詞絵各四段を残すだけの残欠本であるが、梅津氏は様式的に見て「鎌倉末期も比較的上位に、大胆に云へば永仁頃迄は遡り得る」ものといい、秘密縁起系統の現存最古の作品として貴重である。また、梅津氏の一連の論考は、本絵巻の紹介を契機として展開したものであり、その点でも重大な意義を持つ作品であったと言えよう。

③総持寺本は、昭和五十九年（一九八四）に真保享氏が紹介したものである[11]。そこでは簡単な解説しか付されていなかったが、『総覧』で鹿島繭氏が全段の内容を紹介した[12]。今後さらに検討を要する作品であり、ここで、注目すべき点を二、三指摘しておくことにしたい。

上巻は十一段、下巻は五巻からなる。上巻は②安楽寿院本の第二巻全体に相当する八段に、同第一巻から「槐市讃仰」、同第三巻から久

米東塔」を加え、さらに②安楽寿院本にはない「我拝師山」を加えた構成である。第一段「室戸修行」は詞書前半部を欠失する。第五段に位置する「我拝師山」は、六巻本では第二巻第二段にあり、また十巻本では第六巻第三段「釈尊出現」が同様の内容を表している。ただし、六巻本と十巻本では部分的に詞書が異なるが、③総持寺本は六巻本の方にほぼ一致する。下巻は②安楽寿院本の第十巻から第五段「道風受罰」を除いた構成に相当する。上下巻とも、現状が制作当初の状態であるという保証はなく、むしろ残欠を繋ぎ集めた可能性が高いように思われる。

②安楽寿院本と比較すると、「我拝師山」の有無のほか、詞書と図様にも多少の異同が認められる。例えば「久米東塔」では③総持寺本側に二十字余りの脱文があり、「諸処練行」では両者は全く異なる場面を描いている。これらの異同に注目すると、③総持寺本は②安楽寿院本とは異本関係にある作品のように思われるが、この点については、機会を改めて詳しく検討することにしたい。

③総持寺本の上巻末尾には、「河州交野群小松寺常住也　永正拾六年己卯七月上旬」という奥書がある。これにより、本絵巻は永正十六年（一五一九）七月上旬には河内国交野郡小松寺にあったことが知られ、これとさほど隔たらない時期に制作されたものと推定される。一方、②安楽寿院本についても、奥書から応仁二年（一四六八）に河内国交野郡神尾寺で制作されたことがわかっており、半世紀の開きはあるものの、同じ交野郡に二種の秘密縁起が存在していたと言う事実は大変興味深く思われる。

また、③総持寺本の奥書については、かつて梅津氏が言及した『不空庵常住古鈔旧槧録』（昭和十八年〈一九四三〉刊）所収の「弘法大師絵伝」四巻の奥書[13]と全くの同文であることが注目される。おそらく両者は同一の作品と推定されるが、そうであるならば、③総持寺本は昭和十八年には四巻が伝存していた作品の中の二巻ということになり、残る二巻の出現に期待がもたれる。

最後に、⑤和歌山県博本は、平成六年（一九九四）の同館秋期特別展「紀州史絵物語－歴史資料としての絵画作品－」[14]に出品されたもので、近年購入されたものという。同館発行の図録では、江戸時代前期の作品と推定されている。第七巻から第十巻までの四巻で、構成は②安楽寿院本と完全に一致し、欠損も錯簡もない。詞絵ともに②安楽寿院本と大差ない内容であり、この系統の転写本と推定されているが、直接の転写本と見るのは難しいように思われる。絵は白描で、部分的に朱と墨を塗る。各所に色指定の書き入れがなされていることから、粉本的な性格を持つ写本と考えられている。平成八年秋には、川崎市市民ミュージアムの企画展「弘法大師信仰展」にも出品された[15]。

二　六巻本「高野大師行状図画」系統

六巻本系統の作品は、次の二件が知られる。

⑥地蔵院本＊　六巻　十四世紀前半（第一巻を除く）

⑦東京国立博物館本　六巻　天保五年（一八四四）

また、次の三件は、この系統の異本の残欠と推定される作品である。

⑧ワシントンDCサクラー本＊　二巻　十三世紀末―十四世紀初

⑨ホノルル・アカデミー美術館本＊　一巻　十三世紀末―十四世紀初

⑩堂本家本[16]＊　二巻　十三世紀末―十四世紀初

⑥地蔵院本は、「高野大師行状図画」の内題を有し、序文と五十段の事蹟からなる。各巻に目次が、また各段に標題が付されており、これが事蹟名称として用いられている。秘密縁起の②安楽寿院本と比較すると、五十段のうち四十二段は類似した内容の事蹟である。[17]残る八段は②安楽寿院本にはない事蹟であるが、その中の「我拝師山」は前述の如く③総持寺本には収録されている。また、逆に②安楽寿院本にあって、⑥地蔵院本にない事蹟は十五段である。

「長谷目録」では十四番目に収録されており、「彼の類本（十巻本）に依りて箇条を減じて写したるものなるべし」と解説されている。しかし、これと次章で述べる十巻本の⑫親王院本とを比較した梅津氏は、両者の目次や標題の表記に見られる異同等から、むしろ六巻本を増補して十巻本が成立したと考えるべきであると主張した。[18]この点については、筆者も⑥地蔵院本と十巻本の⑬白鶴美術館本を対象として、図様の比較という観点から検討を加え、梅津説を傍証する結果を導き出している。[19]

また、梅津氏は六巻本の成立時期については、⑥地蔵院本の詞書の一節から一つの目処として文永九年（一二七二）という時期を割り出し、その前後であろうと推定した。これは、先に推定した秘密縁起の原本成立時期と相前後するものであり、別系統の「大師伝絵巻」二種が同時期に成立していた可能性も考慮される。しかし、現存する⑥地蔵院本は十四世紀前半を遡るものではなく、また、第一巻は江戸時代の補作である。第一巻の奥書によれば、原本が焼失したため、狩野晴川院養信（一七九六―一八四六）が天保五年（一八四四）に模写していたものをもとにして、門人達に再模写をさせ、同十一年（一八四〇）に寄進したものであるという。そして、この時に用いられた晴川院自筆本が現在の⑦東京国立博物館本であり、このことは「長谷目録」の②安楽寿院本の項でも言及されている。

次に、⑧ワシントンDCサクラー本は、昭和三十九年（一九六四）に宮次男氏が紹介したフリア美術館本のことである。[20]また、⑨ホノルル・アカデミー美術館本は、「長谷目録」の十二番目に見える「弘法大師行状記残欠一巻　久松家蔵」の一部に当たるものである。これと⑩堂本家本は本来一具の絵巻の残欠であり、昭和四十年（一九六五）、真保亨氏によって同時に紹介された。[21]その当時、久松家本は一巻六段が存したが、現在はそのうちの三段がホノルル・アカデミー美術館に

所蔵されるだけで、他は所在不明である。

右の三件は、久松家旧蔵本の所在不明の部分に「応天門額」があるほかは、いずれも地蔵院本と共通する事蹟ばかりを収録していることから、六巻本の残欠本と推定されている。しかし、既に指摘されているように、⑥地蔵院本が有する内題、目次、各巻標題はなく、段の構成、詞書、図様のそれぞれにも⑥地蔵院本とは異なる要素が認められる。したがって、六巻本であるとしても、⑥地蔵院本とは異本関係の作品である思われる。

三　十巻本「高野大師行状図画」系統

十巻本系統の作品は、次の二十二件が知られる。

⑪高野山惣持院旧蔵本　十巻　元応元年（一三一九）
⑫高野山親王院本　十巻　書写年代不明
⑬白鶴美術館本＊　十巻　元応元年（一三一九）
⑭逸翁美術館本＊　一巻（第一巻）　十四世紀
⑮総持寺本＊　一巻（第二巻）　十四世紀
⑯藪本家本＊　一巻（第三巻）　十四世紀
⑰ボストン美術館本＊　一巻（第七巻）　十四世紀
⑱サンフランシスコ・アジア美術館本＊　一巻（第四巻）　十四世紀
⑲ニューヨーク公共図書館本＊　一巻（第一巻）　応永九年（一四〇二）
⑳延暦寺本＊　十巻　応永十四年（一四〇七）
㉑金剛福寺旧蔵本　五巻（第一～四・九巻）　応永二十二年（一四一五）
㉒久保家旧蔵本　四巻（第五・七・八・十巻）　応永二十二年（一四一五）
㉓護国寺本＊　一巻（第一巻）　永享四年（一四三二）
㉔本證寺本＊　一巻（第十巻）　文明三年（一四七一）
㉕個人蔵本＊　十巻　文明六年（一四七四）
㉖大蔵寺本＊　十巻　延徳二年（一四九〇）
㉗宝集寺本＊　九巻（第四巻欠）　永正三年（一五〇六）
㉘六地蔵寺本＊　十巻　天文十五年（一五四六）
㉙随心院本　八巻（第二・四巻欠）　元禄（一六八八－一七〇四）頃
㉚根津美術館本　九巻（第一巻欠）　江戸時代
㉛平間寺本　一巻（第六巻）　江戸時代
㉜仁和寺本　十巻　書写年代不明

「長谷目録」には、右のうち⑪⑫⑭～⑰㉖㉗㉙㉜の十件が収録されている。同目録は、⑫親王院本は⑪惣持院本の写本であり、㉖大蔵寺本、㉗宝集寺本、㉙随心院本もこれと内容を同じくする写本、また㉜

仁和寺本はこの系統の絵巻数種の残欠を取り集めたものであるという。⑭～⑰は本来一具の絵巻であり、同目録の十番目に見える「弘法大師行状図画残欠八巻」の一部に当たる。

以下では、まず⑪から順に一瞥し、最後にその相互関係を概括することにしたい。

⑪惣持院本は「長谷目録」の七番目に「元応元年写」として収録されているものであるが、同目録の編纂時には既に所在不明であったという。長谷氏は『続弘法大師年譜』巻五の記事[22]を引用し、惣持院に十巻の絵巻があったことを紹介するのみである。同年譜には当該絵巻の序文の一部と「絵詞執筆人」と称する跋文が転載されているが、その内容は、「長谷目録」の八番目に収録されている⑫親王院本、および現存する⑬白鶴美術館本と㉗宝集寺本に一致する。ただし、同年譜の記事の中には元応元年（一三一九）の年記はなく、「長谷目録」が「元応元年写」とするのは⑫親王院本によって長谷氏が補ったものである。

次に、⑫親王院本については、「長谷目録」は序文、目次、第十巻巻末の「高野大師御絵詞執筆人々」等を掲載し、これに解説を付す。目次には段ごとの事蹟名称を列挙するが、第九巻の七番目「高野珍瑞」は目次のみで実際にはないと注記する。「高野大師御絵詞執筆人々」には元応元年（一三一九）の年記があり、外題と詞書の筆者名、絵師の名、および本絵巻が「惣持院重宝」であったことなどが記されている。その内容は⑪惣持院本の「絵詞執筆人」と同じであるが、前述の如く、⑪惣持院本には年記はない。解説は、⑫親王院本は「版本行状図画を底本として添削増減して別に一部を成せるものなるべし」と述べているが、これは秘密縁起の②安楽寿院本のところで指摘したように、版本の成立時期を誤認した上での推定であるから取るに足りない。また、長谷氏は、⑫親王院本は惣持院に伝存した原本ではなく、その写本であると断定している。

⑫親王院本は、その後、梅津氏によって調査され、六巻本との比較検討に用いられた[23]。その結果、六巻本と十巻本の関係は、⑥地蔵院本のところで述べたように、十巻本を取捨して六巻本が成立したのではなく、六巻本を増補して十巻本が成立したと考えるべきであることが明らかにされた。その時点までは親王院に伝存していたことが確かめられるが、残念ながら現在は所在不明になっている。

さて、⑪惣持院本と⑫親王院本が所在不明である現在、十巻本諸本の中で最も重要な作品は、昭和五十六年（一九八一）に梅津氏が紹介した⑬白鶴美術館本である[24]。⑬白鶴美術館本は、序文と九十一段の事蹟からなり、「高野大師行状図画」の内題と各巻目次、各段標題を有する。秘密縁起の②安楽寿院本と比較すると、九十一段のうち五十六段は類似した内容の事蹟であるが、残る三十五段は②安楽寿院本にはない事蹟である[25]。逆に②安楽寿院本にあって、⑬白鶴美術館本にない事蹟は五段である。また、六巻本の⑥地蔵院本と比較すると、九十一

段のうち四十九段は両者共通の事蹟であり、⑬白鶴美術館本のみの事蹟は四十二段、⑥地蔵院本のみの事蹟は一段だけである。

⑬白鶴美術館本の保存状態は極めて良好であり、第六巻に一紙欠失があるほかは十巻が完存する。しかも、第一巻巻頭に⑫親王院本と同じ「高野大師御絵詞執筆人々」を有し、元応元年の年記も存している。その内容を詳細に検討した宮島新一氏は、詞書筆者の名に信憑性があることから、この⑬白鶴美術館本こそが⑪惣持院本そのものであると結論づけた[26]。筆者はこれに同意するものであり、本絵巻を十巻本系統の最も基準的な作品と考えている。

次に、⑭逸翁美術館本以下の四件は、先に述べたように「長谷目録」の十番目に収録されている「弘法大師行状図画残欠八巻」の一部である。「長谷目録」は『考古画譜』巻三を引用し、これが松平越中守の旧蔵品で、当時は柏木貨一郎氏の蔵品となっていたことなどを述べる。八巻のうち第一巻から第五巻までの五巻は、その後、三大寺喜兵衛氏の所蔵となり、昭和十四年、重要美術品の指定を受けた。これを逸早く紹介し、『考古画譜』との関係を指摘したのは田口信行氏である[27]。昭和二十九年には、梅津氏が第二巻と第三巻について論じ、その詞書を翻刻した[28]。梅津氏によれば、当時既に三大寺家の五巻は散逸しており、その一部は断簡として出回っていたという。また、そこで第七巻はボストン美術館にあることも明らかにされている。

三大寺家旧蔵の五巻は、現在、第一巻が逸翁美術館、第二巻が総持寺、第三巻が藪本家にそれぞれ所蔵される。残る第四巻と第五巻は断簡となって諸家に所蔵されるが、所在不明の部分も多い。⑬白鶴美術館本と比較すると、構成、詞書、図様ともに異同が多く、十巻本系統の異本と考えられる。なお、⑬白鶴美術館本との比較、および第四巻と第五巻の復原については拙稿を参照されたい[29]。

⑱サンフランシスコ・アジア美術館本と⑲ニューヨーク公共図書館本は、鹿島繭氏が『総覧』で紹介したものである。前者は第四巻で、八段が完存する。画風からは、十四世紀末頃の作品と思われる。平成七年（一九九五）、日本各地で開催された「アメリカが愛した日本」展で公開され、同展の図録に小さいながらも全巻の写真が掲載されている[30]。後者は第一巻で、白鶴美術館本と比較すると、第十一段「明星入口」を欠失する。両本とも図様は、⑬白鶴美術館本よりも次で述べる⑳延暦寺本に近い。

⑳延暦寺本は、梅津氏が論文の中で十巻本の作品として言及したものである[31]。叡山文庫本と呼ばれたこともあるが、現在は延暦寺国宝殿にあるので延暦寺本とした。十巻が完存し、構成は⑬白鶴美術館本に一致する。室町時代の写本は比較的多く伝存するが、その中では延暦寺本が最古の完本である。筆者は先に、これと⑬白鶴美術館本の図様を比較検討し、両者間にいくつかの大きな変化が生じていることを指摘したが、注目すべきことには、延暦寺本以降の写本は、⑬白鶴美術館本ではなく、⑳延暦寺本の図様を継承している場合が多い[32]。この点

からも延暦寺本は、⑬白鶴美術館本とそれ以降の写本を繋ぐ接点として、さらには室町時代の十巻本の展開を考察する上での鍵を握る作品として、極めて重要なものである。

㉑金剛福寺旧蔵本と㉒久保家旧蔵本は本来一具の絵巻であり、昭和四十二年、真保享氏によって紹介された[33]。もとは金剛福寺に第一巻から第四巻までと第九巻の五巻が、久保家に第五・七・八・十巻の四巻があったというが、現在はともに所在不明である。そのため『総覧』には収録しなかったが、これについては、鹿島氏の言及がある[34]。

㉓護国寺本は、宮次男氏が『総覧』で紹介したものである。第一巻であるが、巻首から第三段「四王執蓋」の絵の前半部までを欠く。これについては、筆者は未確認である。

㉔本證寺本は平成七年（一九九五）に、㉕個人蔵本は平成六年（一九九四）に、筆者が紹介したものである[35]。前者は第十巻で、六段が完存する。図様は延暦寺本に近い。後者は第二巻に二紙欠失があるほかは、十巻が完存する。基本的には延暦寺本の図様に近似するが、異同が多い。

㉖大蔵寺本は「長谷目録」の十七番目、㉗宝集寺本は同十八番目に収録されている。前者は十巻が完存するが、後者は第五巻を欠く。両本とも構成は白鶴美術館本に一致する。長谷氏は、㉖大蔵寺本の解説の中で、この二本について⑫親王院本と「同本なり。絵の構図相同じく文言亦全く相同じ」と言うが、その見解にはやや問題がある。確かに、詞書の異同は転写過程で生じる誤謬の範囲内と見ることができる程度のものである。しかし図様については、㉗宝集寺は⑳延暦寺本によく相似するのに対し、㉖大蔵寺本は異同が極めて多く、転写系統が異なることを感じさせる[36]。

㉘六地蔵寺本は、筆者が『総覧』で紹介したものである。十巻が完存するが、白鶴美術館本と比較すると、構成や図様に異同が多く、十巻本の中では異本と見なさざるを得ない作品である。

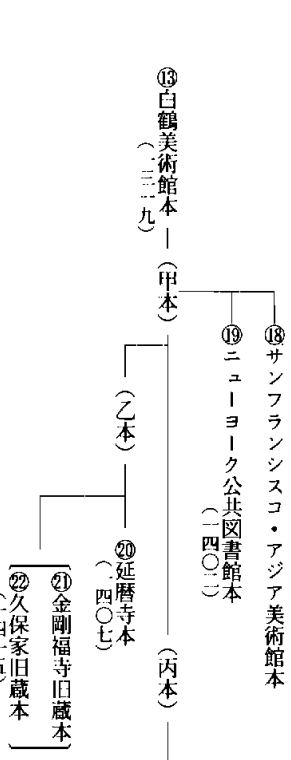
㉙随心院本は「長谷目録」の二十五番目に収録されている。第二巻と第四巻を欠く八巻が存する。長谷氏によれば、絵は狩野常信というが、これについては筆者は未確認である。

㉚根津美術館本は、平成七年春に同館で開催された「伝記と説話の絵」展に出品されていたものである。第一巻を欠く九巻が存する。白鶴美術館本と比較すると、構成や図様の一部に異同があり、六地蔵寺本と同じく十巻本の異本と言うべき作品である。

㉛平間寺本は、平成八年秋に川崎市市民ミュージアムで開催された「弘法大師信仰展」に出品されたものである[37]。第六巻の一部が展示されていたが、全体については未確認である。展示部分と図録掲載部分を見る限りでは、大蔵寺本の図様に最もよく近似する。

㉜仁和寺本は「長谷目録」の二十二番目に収録されている。長谷氏によれば、十巻本系統の絵巻数種の残欠を取り集めたものというが、筆者は未確認である。

図1　十巻本「高野大師行状図画」の転写系統図（案）



・注32・35掲載拙稿で呈示した案に、⑱⑲㉛の三件を書き加えた。
・実線は全体的な影響を、点線は部分的な影響が窺われることを示す。
・括弧内の数字は、製作年を示す。

さて、十巻本系統の作品は、所在不明のものも含めれば、このように多数にのぼる。一二件のうち、⑭～⑰と㉑・㉒はそれぞれ一具の作品であるが、さらに⑪と⑬を同一作品と見なしても、十七件の作品が存在する。しかし、それらは個別に紹介されるだけで、最近まで総合的に論じられることはなかった。この点に初めて目を向けたのは、鹿島氏であり、十巻本をさらに次の四種に分類した。[38] ただし、この分類は直接転写を示すものではないという。

第一種　旧三大寺本・ボストン美術館本
第二種　地蔵院本（六巻本系統）→白鶴美術館本
第三種　延暦寺本→宝集寺本
第四種　金剛福寺・久保家本→大蔵寺本

右の分類は大凡納得できるものである。第一種に分類されたのは⑭逸翁美術館以下の四件であり、本来一具であった作品であるが、前述の如く、これは⑬白鶴美術館本とは異なる点が多く、明らかに異本である。[39] 第二種については、十巻本の作品としては⑬白鶴美術館本が挙げられているのみであるが、その図様と、第三種および第四種に分類された⑳延暦寺本以下の諸本の図様との間に、いくつかの顕著な相違が生じていることは先に述べた通りである。また、第三種と第四種については、それぞれの図様の相違に注目すれば、こうした二系統に分類することも無理ではないであろう。しかし厳密に検討すると、⑳延暦寺本と㉖大蔵寺本、あるいは㉖大蔵寺本と㉗宝集寺本の間にだけ共通性が見られる場合もあり、[40] 右の分類では、このような場合が無視さ

れている点に不満が残る。

一方、筆者は⑬白鶴美術館本、⑳延暦寺本、㉕個人蔵本、㉖大蔵寺本、㉗宝集寺本を対象として、それぞれの図様の相似と異同を検討し、その相互関係に注目して転写系統の推定を行った[41]（図1）。次いで、㉔本證寺本をこれに加えたが[42]、その他の作品もこの中に加えることが可能であると考える。例えば⑱サンフランシスコ・アジア美術館本は、詳細は省略するが、⑳延暦寺本よりも写し崩れが少ないと思われる箇所があり、これに先んじる甲本の位置に当てはめることができそうである。⑲ニューヨーク公立図書館本についても同様である。ただし実際には、両本とも一巻を残すだけの端本であり、白鶴美術館本―宝集寺本という機軸に備わるべき「高野大師御絵詞執筆人々」を存していないので、図1では甲本から派生した傍系に仮置きした。また、㉛平間寺本は大蔵寺本の図様に最もよく近似するので、その延長線上に仮置きしてみた。これらの諸本については、さらに詳しい検討が必要であり、未確認の㉓護国寺本、㉙随心院本、㉜仁和寺本の調査とともに、今後の課題としたい。

また、㉘六地蔵寺本と㉚根津美術館本は、詞書や図様だけでなく、構成の上でも⑬白鶴美術館本との異同が顕著である。しかし、それらの異同は写し崩れとは性格を異にするものであり、むしろ室町時代末から近世にかけての「大師伝絵巻」の変容を示すものとして積極的に評価されるべきもののように思われる。

四　「弘法大師行状絵詞」系統

十二巻本系統の作品は、次の五件が知られる。

㉝東寺本＊　十二巻　応安元年（一三八九）

㉞久保惣記念美術館本　十二巻　慶長元和頃（一五九六―一六二四）

㉟東寺観智院本　八巻　慶長元和頃

㊱個人蔵本　十二巻　桃山～江戸時代初期

㊲角屋本　十二巻　元禄十六年（一七〇三）

「長谷目録」には、㉝東寺本以下の三件が収録されている。

十二巻本の原本は㉝東寺本であり、その成立については梅津氏以下諸氏の論考がある[43]。㉝東寺本は、序文と六十一段の事蹟からなる。ただし第十二巻の三段は同一の事蹟を表しているので、事蹟数は五十九である。そのうち秘密縁起の②安楽寿院本とは四十七事蹟に、六巻本の⑥地蔵院本とは四十四事蹟に、また十巻本の⑬白鶴美術館本とは五十一事蹟に、それぞれ内容の類似性が認められる。三者と比較すると、㉝東寺本独自の事蹟は四事蹟のみである。内題、各巻目次、各段標題はなく、事蹟名称には賢賀僧正筆「弘法大師行状記標題」（宝暦七年、一七五七）記載の標題が用いられている。「長谷目録」では十五番目に収録されており、序文、賢賀僧正の目次、尊応准后の筆者目録、

『考古画譜』の記事などが収載されている。

㉞久保惣記念美術館本は、「長谷目録」の二十番目に見える「弘法大師行状記十二巻　東寺　観智院蔵」に当たるものである。[44]同目録は、㉝東寺本の写本で「文言全同にして図絵亦大同小異なり」と言うが、その通りに極めて忠実な写本である。享保八年（一七二三）の年記を持つ筆者目録が付随しており、同目録はこれと『考古画譜』の記事を収載する。

㉟観智院本は、「長谷目録」の二十一番目に収録されている。長谷氏によれば、第八巻までの端本で、詞はなく絵のみが存するという。これについては筆者は未確認である。

㊱個人蔵本は、かつて梅津氏が調査したものである。[45]残念ながら、紹介されないまま所在不明となっている。

㊲角屋本は、平成四年に筆者が紹介したものである。[46]㉝東寺本から派生した写本であるが、㉞久保惣記念美術館本とは異なり、図様にかなりの改変が認められる。その点では、忠実な模本というよりも、むしろ改訂版的な要素の強い作品である。十二巻本は写本も少なく、変化に乏しい観があるが、近世のものとは言え、このような作品があることは興味深く思われる。

このほか天保四年（一八三三）には、東寺本をもとにした版本（合本六冊）が刊行されている。その後、巻首部分に多少の変更を加えた復刻版も出されているが、本稿では省略する。

五　版本「高野大師行状図画」系統

版本系統の作品は、次の七本が知られる。

㊳横山家本＊　十巻　文禄五年（一五九六）
㊴醍醐寺本　十巻　寛永（一六二四－一六四四）頃
㊵徳力家本　十巻　寛文（一六六一－一六七三）
㊶村口家本（甲）　十巻　寛永頃
㊷村口家本（乙）　十巻　寛文頃
㊸高野山桜池院本　十巻　安永十年（一七八一）

「長谷目録」では、二番目に「版本現流」として収録され、序文と目次に続いて、解説が付されている。しかし、この解説のいう成立年代が誤りであることは、②安楽寿院本のところで述べた通りである。

版本の成立に関しては、川瀬一馬氏の論考が詳しい。[47]それによれば、初版は木食応其（一五三七－一六〇八）が文禄五年（一五九六）に開版したものであるという。その後、江戸時代に二種の復刻本が版行され、版式から第一次は寛永頃、第二次は寛文頃と推定されている。現存作品では、㊳横山家本は初版本、㊴醍醐寺本と㊶村口家本（甲）は第一次復刻本、㊵徳力家本と㊷村口家本（乙）は第二次復刻本であるという。

昭和五年（一九三〇）には、高野山勧学院に伝存する版木に補刻を

加えた第三次復刻本が刊行された（奥書による）。諸処にあり、奈良大学図書館も一本を所蔵するが、これについては省略した。これは第二次復刻本と同版である。また、長谷宝秀編『弘法大師伝全集』第八巻に所収されているものも第二次復刻本である。

㊸桜池本は、「長谷目録」の二十七番目に収録されたものである。長谷氏によれば、肉筆本であるが、内容は版本に同じであるという。これについては、筆者は未確認である。

版本は十巻本と同じく、序文と九十一段の事蹟で構成され、「高野大師行状図画」の内題、各巻目次、各段標題を有する。しかし、内容は同じではなく、詞書は秘密縁起と十巻本を折衷したものである。一方、図様には秘密縁起の影響は認められず、総じて十巻本を踏襲しているが、その中では㉗宝集寺本に最もよく一致することが注目される。

結　語

本稿では、これまで散発的に紹介されていた「大師伝絵巻」諸本を、梅津氏の分類にしたがって系統別に呈示することを試みた。その結果、秘密縁起五件、六巻本五件、十巻本二十二件、十二巻本五件、版本六件の合計四十三件を挙げることができた。しかし、その中には残念ながら現在は所在不明になっているものもあり、その再発見が望まれる。また、未紹介の作品も多数あるものと思われ、それらの出現を期待したい。なお、作品によって言及内容に精粗があるが、先行文献のうち主要なものを注記したので、個々の作品についてはそちらを参照されたい。ただし『総覧』所載のものは、同書に参考文献が紹介されているので省略した場合がある。

さて、このようにして系統別に一覧してみると、同じ系統に分類された作品ではあっても、それらは決して一様なものではないことがわかる。勿論、ある特定の作品を忠実に写したものもあるが、むしろその方が例外的であり、大半の作品はそれぞれ微妙な異同を生じているのである。その異同が事蹟の出入や段の構成に及ぶものを、ここでは異本と見なしてきたが、その異本には二種あるように思われる。一つは、六巻本の⑧ワシントンＤＣサクラー本、⑨ホノルル・アカデミー美術館本と⑩堂本家本、あるいは十巻本の⑭逸翁美術館本以下の四件など、比較的初期の「大師伝絵巻」であり、この場合は、成立過程における個別の事蹟選択が異同の主因と考えられる。一方、秘密縁起の③総持寺本、十巻本の㉘六地蔵寺本、同じく㉚根津美術館本などは、他系統の要素等を取り入れることにより、本来の系統の基準的な状態から逸脱していったものである。その最も端的な例は、秘密縁起と十巻本を折衷して成立した版本の存在そのものであるが、このような「大師伝絵巻」の変容は、室町後半以降に顕著になるように思われる。本稿では、その点に言及することができなかったが、「大師伝絵巻」の中世末から近世へかけての展開の考察は今後の重要な課題である。[48]

（注）

（1）「秘鍵開題」には、大師が宮中で講讃をする場面と人々が巷で病に苦しむ場面が、「高野尋入」には、大師が狩場明神と対面する場面が描かれている。また、その先の松の枝に懸かる三鈷は「三鈷宝剣」を暗示するモチーフである。柳沢孝「真言八祖行状図と廃寺永久寺真言堂障子絵」（『美術研究』三〇〇・三〇二・三〇四・三三二・三三七号、昭和五十一・六十・六十二年）、同「廃寺大和永久寺真言堂伝来の真言八祖行状図－平安後期における説話画の一遺例－」（『国際交流美術史研究会第八回シンポジアム　説話美術』平成二年）参照。

（2）梅津次郎、論文1「池田家蔵弘法大師伝絵と高祖大師秘密縁起」『美術研究』七八号、昭和十三年。同論文2「地蔵院本高野大師行状図画－六巻本と元応本との関係－」同八三号、同年。

（3）黒川真道編『黒川真頼全集第一　訂正増補考古画譜　上巻』明治四十三年。なお、十六件のうち二件は同一作品についての記事であるので、作品数は十五である（注5参照）。

（4）長谷宝秀編『弘法大師行状絵詞伝』所収、弘法大師一千百年御忌事務局発行、昭和九年。本目録は同書の「弘法大師伝目録」から、絵伝だけを抜き出したものである。なお「弘法大師伝目録」所収の大師伝のうち、主要なものは長谷宝秀編『弘法大師伝全集』全十巻（昭和九～十年）において翻刻されている。

（5）『考古画譜』と「長谷目録」の対応関係は次の通りである（『考古画譜』記載の十六件を通し番号を付して列記し、これに「長谷目録」の掲載順位を対応させた）。本稿で言及する作品には、本稿における通し番号を付した。なお、2と13は同一作品である。

『考古画譜』巻三　加部		「長谷目録」	本稿
1 高野大師行状図画刊本　十巻	2	㊳～㊸	（版本系統）
2 同　残欠　八巻	10	⑭～⑰	
『考古画譜』巻四　久部			
3 空海記　残欠	3		
『考古画譜』巻五　古部			
4 弘法大師行状記　十二巻	15	㉝	
5 同	20	㉞	
6 弘法大師行状記	17	㉖	
7 同行状図画	14	⑥	
8 同　残欠	9		
9 同　残欠	13		
10 同　残欠一巻	4.		
11 同縁起　二巻	6		
12 弘法大師行状画　八巻	21	㉟	
13 同　八巻	10	⑭～⑰	
14 弘法大師伝	5		
15 同残欠　一巻	11		
『考古画譜』巻六　志部			
16 四大師伝絵	1		

（6）注2掲載論文1・2。梅津次郎、論文3「東寺本弘法大師伝絵の成立」『美術研究』八四号、昭和十三年。同論文4「弘法大師行状絵巻諸本と白鶴美術館本について」『弘法大師伝絵巻』角川書店、昭和五十八年。論文1・2・3は『絵巻物叢考』（中央公論美術出版、昭和四十三年）所収。

（7）梅津次郎監修『角川絵巻物総覧』角川書店、平成七年。二十三件のうち、一件（護国寺本）を宮次男氏、三件（総持寺本、サンフランシスコ・アジア美術館本、ニューヨーク公共図書館本）を鹿島繭氏、残る十九件を筆者が担当した。

（8）注2掲載論文1。

（9）拙稿「『高祖大師秘密縁起』考－安楽寿院本の構成と内容－」『奈良大学紀要』第二五号、平成九年。

(10) 注2掲載論文1。
(11) 佐藤千尋・金子良運監修『西新井大師総持寺』、西新井大師総持寺発行、昭和五十九年。
(12) 注7掲載書、二〇五頁。ただし、『総覧』記載の法量には間違いがあり、天地は上巻二十七・〇センチ、下巻二十七・一センチである。
(13) 梅津次郎「弘法大師絵巻の諸本について」『弘法大師行状絵巻』、東京美術、昭和五十六年。
(14) 展示番号D－6、和歌山県立博物館編集・発行『紀州史絵物語－歴史資料としての絵画作品－』(平成六年)所収。本絵巻の存在は、同館の小田誠太郎氏より御教示いただいた。
(15) 展示番号9、川崎市市民ミュージアム編集・発行『弘法大師信仰展』(平成八年)所収。
(16) 注7掲載書では「弘法大師伝絵　二巻　京都　個人蔵」として収録されている(二一二－二一三頁)。
(17) 注9掲載拙稿の「安楽寿院蔵『高祖大師秘密縁起』と諸本の関係一覧表」参照。ただし、この表においては、詞書に少しでも共通する文言があれば対応するものとして取り上げたので、段全体では内容がかなり異なっている場合、また一方では絵画化されていない場合も含む。
(18) 注2掲載論文2。
(19) 拙稿「弘法大師伝絵巻の諸問題」『国際交流美術史研究会第八回シンポジアム説話美術』平成二年。
(20) 宮次男「井上家旧蔵弘法大師伝絵巻について」『美術研究』第二三二号、昭和三十九年。
(21) 真保亨「弘法大師伝絵巻－六巻本をめぐって－」『仏教美術』第五七号、昭和四十年。
(22) 長谷宝秀編『弘法大師伝全集』巻六、一二一－一二三頁。
(23) 注2掲載論文2。
(24) 注13掲載論文(東寺蔵「弘法大師行状絵詞」の参考資料として白鶴美術館本全巻の白黒写真が掲載されている)。また、梅津次郎編『弘法大師伝絵巻』(角川書店、昭和五十八年)は、本絵巻全巻をカラーで公刊したものである。
(25) 注17に同じ。
(26) 宮島新一「巨勢派論(下)－平安時代の宮廷絵師－」『仏教芸術』一六九号、昭和六十一年。
(27) 田口信行「三大寺氏の高野大師行状絵」『画説』四十四号、昭和十五年。
(28) 梅津次郎「高野大師行状絵の零巻について」『国華』七五二号、昭和二十九年。
(29) 拙稿1「三大寺家旧蔵『高野大師行状絵』考－逸翁美術館を中心に」『美術史の断面』清文堂出版、平成七年。同2「同－総持寺本を中心に－」『奈良大学紀要』二三号、平成七年。同3「同－藪本家本を中心に－」同二四号、平成八年。同4「同－第四巻と第五巻を中心に－」『フィロカリア』一三号、平成八年。
(30) 展示番号A6、『サンフランシスコ・アジア美術館所蔵ブランデージ・コレクション日本絵画名作展　アメリカが愛した日本』(日本経済新聞社、一九九五年)所収。
(31) 注2掲載論文1。
(32) 拙稿「十巻本『高野大師行状図画』の写本について－延暦寺本を中心に－」『文化財学報』十二号、平成六年。
(33) 真保亨「金剛福寺の高野大師行状図画」『文化財集中地区特別総合調査報告第六集　四国八十八箇所を中心とする文化財(高知)』文化財保護委員会、昭和四十二年。
(34) 鹿島繭「『弘法大師伝絵巻』十巻本について」『ミュージアム』五一四号、平成六年。
(35) ㉔本證寺本は、拙稿「本證寺蔵『高野大師行状図画』考－十巻本系写本の補考をかねて－」(『文化財学報』一三号、平成七年)、㉕個人蔵本は注32掲載拙稿。

近世的な展開を示すものとして注目される。

（付記）
本稿は、平成八年度に鹿島美術財団より助成を受けた研究の成果の一部である。

(36) 注32掲載拙稿参照。
(37) 展示番号8、注15掲載書所収。
(38) 注34掲載鹿島論文。
(39) 注29掲載拙稿参照。
(40) 注32掲載拙稿、第三章参照。
(41) 注32掲載拙稿、第四章参照。
(42) 注35掲載拙稿。
(43) 注7掲載書の該当項目参考文献の欄参照。
(44) 本絵巻は長らく所在不明となっていたものであるが、久保惣記念美術館の河田昌之氏の御教示により、同館にあることが判明した。
(45) 本絵巻の存在は、梅津氏から御教示いただいた。
(46) 拙稿「角屋所蔵『弘法大師行状記絵巻』について」『角屋研究』第二号、平成四年。また、続稿として「角屋本『弘法大師行状記絵巻』再考―東寺本との図様比較を中心に―」（『奈良大学紀要』二一号、平成五年）を草した。
(47) 川瀬一馬「文禄五年版高野大師行状図画について」『書誌学』復刊新第五号、昭和四十一年。
(48) 「長谷目録」所収の三十一件のうち、本稿で言及できたのは十七件のみである。残る十四件のうち、一件（三十番目）は掛幅本であるため、六件（一・三・五・九・十一・十三番目）は内容不明であるために除外した。また、一件（四番目、焼失）は秘密縁起系統の可能性が考慮されるが、断定するには至らず、一件（六番目、所在不明）は内容の一部は記されているが、やはり系統を判断するには至らない作品である。残る五件（二十三・二十四・二十六・二十八・三十一番目）は、いずれも近世以降に製作されたものである。「長谷目録」は、二十三番目は版本を、二十八番目は十巻本を改作したものというが、筆者は未確認であるので本稿では除外した。他の三件は、内容的に本稿で扱った五系統には分類しきれない作品である。これらも「大師伝絵巻」の